

文  
甲  
四

三  
二  
五

昭和十四年二月十六日

内閣書記官長

内閣書記官

内閣總理大臣

佐

法制局長官

外務大臣

佐

陸軍大臣

菊

文部大臣

尾

逓信大臣

五

厚生大臣

為

内務大臣

五

海軍大臣

五

農林大臣

雄

鐵道大臣

忠

近衛總理院議長

大藏大臣

五

司法大臣

五

商工大臣

五

拓務大臣

五

別紙文部大臣請議官立工業大學官制

中改正ノ件

ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依テ請議ノ通

去  
司  
局



閣議決定セラレ可然ト認ム

勅令案

朕官立工業大學官制中改正ノ件ヲ裁  
可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和十四年二月二十一日

内閣總理大臣  
文部大臣

呈案附箋ノ通

昭和十四年一月二日

文部書記官朝比奈策太郎

發專三四四號

官立工業大學官制中改正ノ必要ヲ認メ別紙勅令案附理由書ヲ具シ閣議  
ヲ請フ

昭和十四年一月十一日

文部大臣 男爵 荒木 貞夫

内閣總理大臣 男爵 平沼 騏一郎 殿



文部省

文部省



勅令第三十二號

官立工業大學官制中左ノ通改正ス

第二十條 東京工業大學ニ資源化學研究所ヲ附屬セシム

資源化學研究所ハ資源ニ關學ノ、、學理及應用ノ研究ヲ掌ル

資源化學研究所ニ所長、所員、助手及書記ヲ置ク

所長ハ東京工業大學教授ノ中ヨリ、所員ハ東京工業大學助教授ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス所長ハ東京工業大學長ノ監督ノ下ニ於テ資源化學研究所ノ事務ヲ掌理シ所員ハ所長ノ監督ノ下ニ於テ資源化學研究所ニ於ケル研究ヲ掌ル

東京工業大學教授ニシテ所長ニ補セラレタル者及東京工業大學助教授ニシテ所員ニ補セラレタル者ニハ授業ヲ擔任セシメサルコトヲ得



勅令第 三十二 號

官立工業大學官制中左ノ通改正ス

第二十條 東京工業大學ニ資源化學研究所ヲ附屬セシム

資源化學研究所ハ本スル化學ノ、、學理及應用ノ研究ヲ掌ル

資源化學研究所ニ所長、所員、助手及書記ヲ置ク

所長ハ東京工業大學教授ノ中ヨリ、所員ハ東京工業大學助教授ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス所長ハ東京工業大學長ノ監督ノ下ニ於テ資源化學研究所ノ事務ヲ掌理シ所員ハ所長ノ監督ノ下ニ於テ資源化學研究所ニ於ケル研究ヲ掌ル

東京工業大學教授ニシテ所長ニ補セラレタル者及東京工業大學助教授ニシテ所員ニ補セラレタル者ニハ授業ヲ擔任セシメサルコトヲ得



助手ハ東京工業大學助手ノ中ヨリ、書記ハ東京工業大學書記ノ中ヨリ  
東京工業大學長之ヲ補ス助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ資源化學研究所ニ於  
ケル研究ニ從事シ書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ資源化學研究所ノ事務ニ從  
事ス

別表中助教授ノ欄「三十七人」ヲ「三十九人」ニ、助手ノ欄「六十九人」  
ヲ「七十四人」ニ、書記ノ欄「十八人」ヲ「十九人」ニ改ム

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

理 由 書

資源ノ化學的開發利權スル學理ヲ探究シ其ノ應用ニ依ル新工業ノ創拓  
及既存工業ノ改善刷新ヲ圖ルハ刻下喫緊ノ要務ナリト認メ新ニ東京工  
業大學ニ資源化學研究所ヲ附屬セトスルニ由ル而シテ助教授二人、助手  
五人及書記一人ノ増員ハ夫々資源化學研究所ノ所員、助手及書記ニ充  
ツルモノトス



助手ハ東京工業大學助手ノ中ヨリ、書記ハ東京工業大學書記ノ中ヨリ  
東京工業大學長之ヲ補ス助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ資源化學研究所ニ於  
ケル研究ニ從事シ書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ資源化學研究所ノ事務ニ從  
事ス

別表中助教授ノ欄「三十七人」ヲ「三十九人」ニ、助手ノ欄「六十九人」  
ヲ「七十四人」ニ、書記ノ欄「十八人」ヲ「十九人」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

理由書

資源ノ化學的開闢ニ關スル學理ヲ探究シ其ノ應用ニ依ル新工業ノ創拓  
及既存工業ノ改善刷新ヲ圖ルハ刻下喫緊ノ要務ナリト認メ新ニ東京工  
業大學ニ資源化學研究所屬セシメントスルニ由ル而シテ助教授二人、助手  
五人及書記一人ノ増員ハ夫々資源化學研究所ノ所員、助手及書記ニ充  
ツルモノトス



参照

官立工業大學官制

昭和四年四月  
大藏省

(總理文部  
大臣訓令)

第十九條 東京工業大學ニ建築材料研究所ヲ附屬セシム  
建築材料研究所ハ建築用材料ニ關スル學理及應用ノ研究ヲ掌ル  
建築材料研究所ニ所長、所員、助手及書記ヲ置ク  
所長ハ東京工業大學教授ノ中ヨリ、所員ハ東京工業大學ノ教授又ハ助教  
授ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス所長ハ東京工業大學長ノ監督ノ下ニ於テ建  
築材料研究所ノ事務ヲ掌理シ所員ハ所長ノ監督ノ下ニ於テ建築材料研究  
所ニ於ケル研究ヲ掌ル  
東京工業大學教授ニシテ所長又ハ所員ニ補セラレタル者及東京工業大學  
助教授ニシテ所員ニ補セラレタル者ニハ授業ヲ擔任セシメサルコトヲ  
得  
助手ハ東京工業大學助手ノ中ヨリ、書記ハ東京工業大學書記ノ中ヨリ東  
京工業大學長之ヲ補ス助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ建築材料研究所ニ於ケル  
研究ニ從事シ書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ建築材料研究所ノ事務ニ從事ス

(別表)

官立工業大學職員定員表

東京工業大學	大學長	教授	助教授	事務官	學生主事	助手	書記	學生主 事補	司書	技手	附屬 教授	附屬 助教	附屬 助手
	一人	三十二人	三十七人	一人	一人	六十九人	十八人	一人	五人	三人	九人	一人	二人



日本標準規格B5(十一行全)(富井納)

参照

昭和十三年度文部省所管官立大學特別會計豫算

歳出經常部

第一款 官立大學

第一項 俸給

第二目 奏任俸給

第三節 助教授

一、八、〇、〇

内

四、〇、〇

二、人

平均年俸 一、八、九、〇、〇

(三、四、月) 九、四、五

職務俸

常務理事、研究員、所長、主任研究員

二、人

平均年額 二、七、〇、〇 (三、四、月) 一、三、五

第三目 判任俸給





第四節 助 手  
第七節 書 記

一、一、三 五人平均年額八九〇圓 但三箇月  
二、四、七 一人年額九八五圓 但三箇月

日本標準規格圖例(十一行全)(富井 納)

東京工業大學關係資料



資源化學研究所設置並之ニ件ヲ職員増員ノ理由

一、資源化學研究所設置ノ理由

(一) 總 說

凡ソ國家ノ興隆ハ學術ノ振興發達ニ依ルベキモノカラスルニ僅ミ、  
宜シク獨創的研究ニ依ル文化ノ創造ト其ノ應用ニ依ル産業ノ創設ヲ  
企圖スベク、殊ニ今ヤ非常ノ時局ニ際會シ更ニ之ヲ強化シ其ノ成果  
ヲ大ナラシムルタメ極力之ヲ鼓勵促進シ、以テ富國強兵ノ實ヲ舉ゲ  
サルベカラズ。

惟マニ晩近我國ノ學術研究大ニ振興シ産業ノ發達及國防ノ充實ニ寄  
與スル所極メテ顯著ナルモノアリ、專ラ學術ノ輸入又ハ模倣ヲ專ト  
シタル時代ニ比シ眞ニ隔世ノ感ナキ能ハサル所ナリト雖モ、今之ヲ



歐米諸國ニ比スルニ一般學術ノ普及發達ニ關シテハ何等ノ遜色アルヲ認メザルモ、之ガ獨創的研究ニ關スル限り未ダ彼ニ及バザルニト僅少ナラザルモノアリ、世界ニ諱ル發明發見ニ至リテハ甚ニ寥々タルノ感ナキ能ハザルハ頗ル遺憾トスル所ナリ。

## (二) 資源化學ノ重要性

國運ノ進展ト國民ノ福祉増進トヲ念慮スベキ現代文化國ニ於ケル最大關心事ハ、其ノ源泉タル資源ノ利用獲得ニ在リ。資源ハ昔ニ平時ノ關係ニ於テ國利民福ト本質的ニ相關聯スルノミナラス、非常時局ニ際シテハ其ノ全資源ハ即チ其ノ僅直接國防力ヲ構成スルモノニシテ、資源ノ利用獲得ハ平時戰時ヲ問ハズ國家社會存榮ノ中樞問題ナリト謂ハサルベカラズ。

我國ニ於テハ資源寡少ヲ論ゼラルルコト既ニ久シト雖モ、右ハ歐米ヨリ輸入シ又ハ模倣シ、歐米ヲ對象トシ研究シ發達シタル學術ヲ基礎トスル今日ニ於テハ甚ニ已ムヲ得ザル所ナリ。然レドモ今日ノ資源ハ必ズシモ明日ノ資源タリト言フヲ得ズ、今日ノ資源タラザル物モ明日ノ重要ナル資源タリ得ベク、要ハ資源ヲ創造シ育成シ利用シ又ハ活用スルノ施設ニ於テ間然スル所ナキヤ否ニ存スルモノト謂ハザルベカラズ。資源化學ハ化學的手段ニ依リテ資源ヲ創造シ育成シ利用シ活用スルノ方法ヲ探究スルニ在リ。

近代ノ戰亂ハ甚メテ多量ノ物資ヲ必要トスルヲ以テ、一國ノ資源ト工業力コソハ其ノ勝敗ヲ決定スル最後の條件ナリ。而シテ資源ヲ創造シ利用スルノ途ハ化學ノ力ニ俟ツコト大ニシテ、化學工業ノ充實



ナクシテハ國防ノ充實ナシト稱スルモ取テ過言ニ非ザルヲ信ズ。  
今歐洲大戰ニ例ヲトルニ、歐洲大戰ニ際シテハ諸種ノ化學工業創設  
セラレ擴張セラレ、就中化學工業ノ各部門ニ於テ重要缺クベカラザ  
ル地位ヲ有スル電氣化學工業者シク勃興シ、從來不可能トセラレタ  
ル各種資源ノ開發利用ニ成功シタリ。戰爭勃發ト共ニ獨逸ハ幾許モ  
ナクシテ聯合國ノ封鎖スル所トナリ銅ノ入手ニ困難ヲ來シタルヲ以  
テ、之ガ回收方法及代用品ノ研究ニ努メタリ。即チ電氣分解法ニ依  
リ銅ト錫トノ分離ニ成功スルコトニ依リ錫、銅像等ヲ利用シ、又銅  
代用ノ金屬トシテ送電線ニ用ヒタル「アルミニウム」ハ電氣化學製  
品ニシテ戰前ニ於テハ國內產額極メテ少ク而シテ英、米等ヨリ輸入シ  
ツツアリタルモ、戰時中國内資源ヲ開發シ多量ノ鑛出ヲ爲シ得タリ。

又砲彈ニ使用スル銅帶ニ代用シタル電解鐵ハ「フィツシャー」教授  
ノ研究ニナル電解法ニヨリ始メテ製造シ得ラレタルモノナリ。窒素  
化合物ニ關シテモ、合成「アンモニア」法ニ依リ窒素ヲ固定シ「ア  
ンモニア」ヨリ硝酸及硝酸「アンモニウム」ヲ製造シ火藥ノ材料ト  
ナシタルモ、他方石灰窒素法ニテ多量ノ窒素ヲ固定セシムルタメ政  
府自ラ石灰窒素工場ヲ設立シタリ。コノ方法ニ於テハ一旦「カーバ  
イト」ヲ製造スルモコノ「カーバイト」ノ製造ハ電氣爐ノ高温度ヲ  
以テセザレバ到底工業化スルヲ得ザルナリ。  
以上ハ單ニ一、二ノ例ヲ舉示シタルニ過ギサルモ、斯ノ如キ事例ハ  
枚舉ニ暇ナキ所ナリ。

(三)資源化學研究所ヲ東京工業大學ニ附置スルヲ可トスル理由



東京工業大學ニ於テハ凡ニ化學工業ノ一部門タル電氣化學ノ重要性ヲ認メ、前身東京高等工業學校時代ヨリ電氣化學科ヲ設置シ學生ノ指導教授及研究ヲ爲シ來リ、我國電氣化學工業ノ發達ニ對シ貢獻セカラサルモノアリ。

今ヤ本工業ハ研究ノ分野益々廣汎トナリ國防上又産業上極メテ重大ナル關係ヲ有スルニ至リタルヲ以テ、從來ノ如キ姑息ニシテ部分的ナル無統制ノ研究ノミニテハ到底國家社會ノ要望ニ應フルニ至ラズ、殊ニ今次事變ノ進展ニ伴フ建設事業ノ大眼目タル「東亞資源ノ開發」ナル使命遂行上統制アリ實力アル國家ノ研究機關ヲ設置シ系統的ニシテ秩序アル研究ヲ爲スノ必要アルヲ以テ、茲ニ資源化學研究所ヲ創設セントスルモノナリ。而シテ東京工業大學ハ我國大學ニ於ケル

唯一ノ電氣化學工業ノ授業及研究施設ヲ保有シ、本工業ニ關スル學識經驗豊富ニシテ幾多ノ業績ヲ舉ゲタル數多ノ人材ヲ網羅セルヲ以テ、東京工業大學ニ資源化學研究所ヲ附置スルハ最も效果的ニシテ時宜ニ適スル方策ナリト認ム。



二職員増員ノ理由

助教授二名、助手五名、書記一名

東京工業大學ニ資源化學研究所設置ニ伴ヒ、所員トシテ所長ノ監督ノ下ニ於テ資源化學研究所ニ於ケル研究ヲ掌ルベキ助教授二名、上司ノ指揮ヲ承ケ資源化學研究所ニ於ケル研究ニ従事スベキ助手五名、上司ノ指揮ヲ承ケ資源化學研究所ノ事務ニ従事スベキ書記一名ノ増員ヲナサントス。



(参照)

一、増員セラルベキ助教候補者

目下詮衡中

二、資源化學研究所ニ於ケル研究事項ノ概要

資源化學研究所ニ於ケル研究事項左ノ如シ。

一金屬ノ新製造法及新利用法

イ、アルミニウムニ關スル研究

ロ、マグネシウムニ關スル研究

ハ、亜鉛ニ關スル研究

二肥料ノ新製造法

イ、尿素ニ關スル研究

ロ、燐酸肥料ニ關スル研究

ハ、加里肥料ニ關スル研究

三醋酸纖維素新製法



- イ、人糞及人糞毛ニ關スル研究
- ロ、フイルムノ可成物ニ關スル研究
- 四 電力ノ利用
- イ、石灰窒素ノ利用法ニ就研究
- ロ、カーバイド利用ニ就研究
- 五 製糖事業ニ伴フ關係事項
- イ、副産物ノ處理ニ關スル研究
- 六 製鹽事業ニ關スル新事項
- イ、副産物ノ新利用法ニ關スル研究
- 七 火藥ノ新製法ニ關スル研究
- 八 燃料ニ關スル研究
- 九 其ノ他化學資源ニ關係アル事項ニ關スル研究

三、資源化學研究所職員配置調

區分	職員配置			
	主任	助役	助手	書記
金屬問題ニ關スル部	一人	一人	一人	一人
肥料問題ニ關スル部	一人	一人	一人	一人
製糖問題ニ關スル部	一人	一人	一人	一人
製鹽問題ニ關スル部	一人	一人	一人	一人
醋酸纖維素問題ニ關スル部	一人	一人	一人	一人
其ノ他ノ部	一人	一人	一人	一人
事務	一人	一人	一人	一人
計	△四二	△三二	△一五	—

(備考)

△印ハ業務トス

主任助教授二人中一人ハ金屬問題及肥料問題ヲ、他一人ハ製糖問題及製鹽問題ヲ研究ス



四東京工業大學教授。助教。助手定員現員調

昭和十三年十二月二十八日現在

學科	定員	現員	助教	現員	助手	現員	備考
染料化學科	二	X一二	二	二	四	三	助手現員ノ外助手代囑託一
紡織學科	三	二	三	(内在外一)四	六	四	助手現員一名基礎學部室ヨリ流用一
窯業學科	二	二	二	二	四	四	
應用化學科	四	X一三	四	三	七	七	
電氣化學科	二	二	二	一	四	五	助手一名機械工學科ヨリ流用

機械工學科	六	五	五	一	八	助手一名電氣化學科へ流用
電氣工學科	四	X四	四	七	六	助手代講師一
建築學科	四	四	三	(内在外一)七	四	助手代講師一、助手一
基礎學部室	五	五	九	(内在外一)八	一三	助教授一名紡織學科へ流用
建築材料研究	!	!	三	三	六	助教授一名上中
計	三二	X二五九	三七	X三二四	六九	六〇

最近資料付後掲参照



(備考)

×印ハ兼任者ニシテ外數トス

(参照)

東京工業大學講師調

昭和十三年十二月二十八日現在

染料化學科

1人

紡織學科

6

窯業學科

2

應用化學科

1

電氣化學科

4

機械工學科

5

電氣工學科

5



建築學科	一〇
基礎學教室	六（内在外中一）
建築材料研究所	一
計	三九

五、東京工業大學書記定員現員調

昭和十三年十二月二十八日現在

區分	定員	現員	備考
庶務	五	四	建築材料研究所ノ分一人ヲ含ム
會計	一〇	九	建築材料研究所分一人ヲ含ム
教務及學生事務	三	三	
計	一八	一六	

記載正誤資料ニ付後掲参照



六東京工業大學資源化學研究所建物調

區分	坪數	竣工年月日	備考
金屬資源研究室	一二坪	昭和十三年十二月二十五日 以下同ジ	
肥料資源研究室	六		
ハルブ研究室	一二		
製鹽研究室	一二		
醋酸纖維素研究室	六		
第一測定室	四		
第二測定室	四		
略室	四		
天秤室	四		

×線室	四		
工作室	四		
有機分析室	六		
準備室	四		
圖書及陳列室	七		
所長室	六		
所員室	一二		
事務室	九		
小使室	三		
廊下其他	二九		
合計	一五〇		



七 豫 算 關 係

東京工業大學資源化學研究所施設ニ要スル經費

區 分	所 要 額	各 年 度 割		備 考
		昭和十三年度 (三ヶ月分)	昭和十四年度 (九ヶ月分)	
官立大學	二七、六四六	六、九一二	二〇、七三四	所 長
俸 給	一〇、五三五	二、六三五	七、九〇〇	
勸任俸給	七八〇	一九五	五八五	
教 授	七八〇	一九五	五八五	
奏任俸給	四、三二〇	一、〇八〇	三、二四〇	
助教授	專任三人三、七八〇	專任二人九四五	二、八三五	
同	兼任二人五四〇	兼任一人一三五	四〇五	
判任俸給	五、四三五	一、三六〇	四、〇七五	
助 手	五人 四、四五〇	五人 一、一一三	三、三三七	
書記	一人 九八五	一人 二四七	七三八	

校 費 一六、一一一 四、二七七 一、三八三



附記

法 制 局

一 各種試験研究機關ノ統合調整ヲ圖リ既設機關ノ間ニ於ケル無統制ノ孤立的研究ヲシテ相互ニ聯絡アラシムルト共ニ此ノ種機關ノ新設ニ當リテモ設置個所ノ適否ヲ検討スルハ喫緊ノ要務ト認メ爰ニ文部大臣ノ監督ノ下ニ科學振興調査會ヲ設置シタル次第（同會官制制定ノ際ノ當局附記參照）ナルガ本件資源化學研究所ヲ東京工業大學ニ附置スルニ付別ニ同調査會ヲ利用シテ之ニ諮問シ其ノ意見ヲ徵シタル形跡ナシ。仍テ此ノ點ニ付原案者側ノ説明ヲ求メタルガ要スルニ（イ）本件ノ經費ハ本年度ノ追加豫算ヲ以テ先ニ認メラレ居リ右調査會ハ昨年八月ニ至リテ甫メテ官制ノ公布ヲ見タル關係上本件ハ右調査會ニ諮問セザルコトト致度（ロ）加之本件研究所ノ設置費ハ東京工業大學教授加藤某ガ研究ノ傍ラ得タル特許權ヲ民間會社ニ賣却シ其ノ對價ヲ同大學ニ寄附シタルモノヲ以テ之ニ充テ既ニ設備ノ過半ハ竣功シ居リ、寄附者ノ意思ヨリスルモ本研究所以同大學以外ニ設置スルコトスルハ情ニ於テ忍ビザル所アリ。ハ又研究所ノ設置ノ如キ大局ヨリ觀テ他日國運ノ進展ニ資スルコト大ナルベキヲ疑ハザルヲ以テ如上特殊事情ノ存スル場合ニ於テハ寧ロ無條件ニ本研究所以設置ヲ工業大學ニ容認シ此ノ種特志家ノ出現ヲ獎勵スルヲ以テ得策ト認ムベキヲ以テ本件ハ特ニ原案ヲ容ルルニ決シタリ。

二 官制ノ形式ニ付



(イ)「資源化學」ノ語ハ學術語トシテモ新語ニ屬シ其ノ意義必ズシモ明ナラザルヲ以テ(研究所名ニ冠スルハ兎モ角)研究所ノ研究事項ノ説明中ニ之ヲ用フルハ迷ニ贊意ヲ表スル能ハザル所ナリ。仍テ原案者側ニ之ガ説明語ノ選擇ヲ求メタルニ

一、資源ノ化學的開發ニ關スル學理及應用

二、資源ノ化學ニ關スル學理及應用

三、資源ニ關スル化學ノ學理及應用

四、資源ノ開發利用ニ關スル化學ノ學理及應用

五、資源ノ開發利用ニ必要ナル化學ニ關スル學理及應用

ノ五案ヲ得タルヲ以テ三號ヲ採リテ原案ニ其ノ趣旨ノ修正ヲ加ヘタリ。

(ロ)原案第二十條ノ改正規定ハ現行第十九條ノ規定ト殆ド同ル所ナキヲ以テ第十九條ニ資源化學研究所ニ關スル規定ヲ挿入スルノ案ヲ稽ヘタルガ規定錯雜ニ過グル(後掲參考参照)ノ誤アルヲ以テ此ノ方法ヲ採ラザリキ。

(參考) (傍線ノ個所ハ現行條文ニ對スル改正個所)

工業大學官制中左ノ通改正ス

第十九條 東京工業大學ニ建築材料研究所及資源化學研究所ヲ附屬セシム

建築材料研究所ハ建築材料ニ關スル學理及應用ノ研究、資源化學研究所ハ資源ノ化學的處理ニ關スル學理及應用ノ研究ヲ掌ル



建築材料研究所及資源化學研究所ニ各所長、所員及書記ヲ置ク  
所長ハ東京工業大學教授ノ中ヨリ、所員ハ建築材料研究所ニ在リテハ東京工業大學  
ノ教授又ハ助教ノ中ヨリ、資源化學研究所ニ在リテハ東京工業大學助教ノ中ヨ  
リ文部大臣之ヲ補ス所長ハ東京工業大學長ノ監督ノ下ニ於テ研究所ノ事務ヲ掌理シ  
所員ハ所長ノ監督ノ下ニ於テ研究所ニ於ケル研究ヲ掌ル  
東京工業大學教授ニシテ所長又ハ所員ニ補セラレタル者及東京工業大學助教ニシ  
テ所員ニ補セラレタル者ニハ授業ヲ擔任セシメサルコトヲ得  
助手ハ東京工業大學助手ノ中ヨリ、書記ハ東京工業大學書記ノ中ヨリ東京工業大學  
長之ヲ補ス助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ研究所ニ於ケル研究ニ從事シ書記ハ上司ノ指揮  
ヲ承ケ研究所ノ事務ニ従事ス



東京工業大學助手定員現員調

昭和十四年二月七日現在

學 科		助 手		備 考
定 員	現 員	定 員	現 員	
染料化學科	四	四	四	
紡織學科	六	四	四	
無機學科	四	四	四	
應用化學科	七	七	七	
電氣化學科	四	五	五	
機械工學科	一	八	八	
電氣工學科	七	七	七	



建築學科	基礎學教室	建築材料研究所	計
七	一三	六	六九
四	一四	六	六三
一名建築學科ヨリ流用			

東京工業大學書記定員現員調

昭和十四年二月七日現在

區分	定員	現員	備考
庶務	五	五	現員中一名上申中
會計	一〇	九	
教務及學生事務	三	三	
計	一八	一七	



文 部 省

「資源化學」ノ意義

資源化學トハ化學ニ依リ資源ノ利用開發ヲ攻究スル學ナリ即チ化學的  
手段ニ依リテ資源ヲ創造シ育成シ、利用シ又ハ加工シ若クハ活用スル  
等ノ方途ヲ攻究スルモノヲ謂フ



資源化學ノ重要性及之カ独立セル研究所

ヲ東京工業大學ニ附屬セシメントスル理由

東亜資源ノ開發ハ東亜資源ヲ對象トスル獨創的研究ニ俟ツベク之  
ガ振興發達ヲ企図シ促進スルハ刻下喫緊ノ要務ニ屬スルヤ疑ナキ  
所ナリ而シテ資源化學ハ化學ノ力ニ依リ資源ヲ創造シ育成シ  
利用シ活用スル等ノ方途ヲ探究セントスルモノナルモ未ダ學トシテ  
ノ資源化學 (Chemistry of resources ト謂フベキモノナルベシ) ナル  
モノ存在セザリシハ寧ろ奇異トスル所ナリ然レドモ右ハ單ニ資源化  
學トシテ存在セザリシニ止リ歐米ニ於テハ歐米ニ存在スル資源ヲ對  
象トシテノ化學ハ發達ハ極メテ古ク現今ニ於テハ既ニ資源ナル  
總括的名稱ヲ使用スルコトナク個々ノ細目的名稱ヲ附シタル化學  
トシテ存在スルニ至レリ例ヘバ (Coal-tar chemistry, Chemistry of  
silicates 等) ナリ



我國ニ於テハ從來資源化學ナル總括的名稱ヲ附シタルモノハ勿論  
之カ細目的名稱ヲ附シタルモノ存在セザリシモ時局ハ之ヲ等閑ニ  
附スルヲ許サズ之ガ研究發達コソハ將來ニ於ケル我國運發展ノ根  
基ヲ爲スモノトシテ極メテ重要視セラル、ニ至レリ而シテ凡ソ學術ノ  
發達ハ總括的概念的研究ヨリ次第ニ細ニ入り微ニ涉ルヲ常態トス  
ルモノニシテ我國ニ於ケル資源化學ニ於テモ亦先ヅ以テ總括的研  
究ヲ開始シ順次細目的研究ニ向ヒ進行スルヲ妥當トス

東京工業大學ニ於テハ夙ニ資源化學研究ノ重要性ヲ認識シ既ニ  
之ニ必要ナル幾多ノ施設並ニ人的要素ヲ保有セリ 今同大學ニ  
於テ從來堅持セル研究方針ヲ擧グレバ

一、改米等ノ模倣ヲ排シ獨創ニシテ有效ナル方法ヲ研究立案スルコト

二、東亞特有資源ノ利用ニ依ル製造工業ノ樹立ヲ目標トスルコト

三、國防上又ハ産業上ノ必要<sup>需品</sup>ニシテ改米ニ於テ研究セラレザル新ナル  
製造工業ヲ樹立スルコト

等ニシテ其ノ結果從來幾多ノ業績ヲ擧ゲ得タルハ周知ノ事實ナリ  
以上述べタルガ如キ事由ニ基キ東京工業大學ニ資源化學研究所ヲ附  
屬セシムルハ現下最モ妥當適切ナリト謂フヲ得バク由テ以テ系統的ニ  
シテ秩序アル研究機関ヲ特設シ其ノ事業ヲ開始スルニ於テハ學術上ハ  
勿論産業上國防上其ノ成果コソ期シテ待ツベキモノアリト信ズ



資源化學研究所ニ於ケル研究事項ニ関スル説明書

一 金属ノ新製造法及新利用法

イ、アルミニウムニ関スル研究

「アルミニウム」自給ニハ日滿支ニ産スル資源（燐酸礬土、珪酸礬土、如キ）ヲ原料トナスガ今日ノ急務ト思フ。此問題解決ニ関スル本邦ニ於ケル研究ハ一時盛ントナツタガ現在ニ於テハ東京工業大学ニ於ケル研究ヲ除キ他ハ殆ンド工業界ヨリ顧ラレナイ様ニナツタ。同大学ニ於ケル研究ハ硫酸法デアツテ現行ノ硫酸製造ト併營サル、トキハ近キ將來ニ於テハ「アルミニウム」自給ハ極メテ容易デアル。硫酸法ハ欧米ニテハ尙不成功ノ域ヲ脱シナイ。然ルニ東京工業大学ニ於ケル研究ノ結果其ノ一部（燐酸礬土ニ関スルモノ）ハ已ニ一大會社ノ設立ヲ見ルニ至ツタ。更ニ一步ヲ進メテ滿支ニ無盡藏ト稱セラル、珪酸礬土ヲ資



料トシ研究スレバ「アルミニウム」自給（現在ハ輸入ボーキサイトニ依存）ノ見込ガ立ッ様ニナルト思フ

#### ロ「マグネシウム」ニ関スル研究

「マグネシウム」ハ将来莫大ナル需用ガ予想サレテナルヲ東京工業大學ニ於テ研究ニ係ル工業區自給策樹立ノ研究ニヨリバ莫大ナル増産マ「グネシウム」ノ副成ガ予想セラレルニ至ッタ此原料ハ精製ト脱水トハ「マグネシウム」製造上重要ナ問題デアル此等ニハ同大學ノ研究ニヨリ維持ノ方法ヲ立案セラレタガ之ガ工業化ニハ更ニ此立案ニ其キ更ニ學術的研究ヲ必要トスル

#### ハ、亜鉛ニ関スル研究

亜鉛ノ欠乏ハ現在著シイモノガアル而モ今日ノ亜鉛工場ニハ二〇—三〇%ノ亜鉛ヲ含有スル滓ガ山積サレテ居ル

此滓ヨリ亜鉛ヲ回收スルハ政府モ重要問題トシテ之ガ解決ヲ肝勵シツ、アル、エチニシテ東京工業大學ノ研究ニヨリ維持ノ新硫酸ガ立案セラレタルモ其ノ工業化ニハ更ニ一段ノ學術的研究ヲ必要トスル

### ニ肥料ノ新製造法

#### イ、尿素ニ関スル研究

尿素ハ理想的ナ肥料デアル、東京工業大學ニ於テ研究ノ結果之ヲ石灰窒素ヨリ製スルコトガ得策ナリトシテ新方法ヲ立案シ更ニ其ノ工業化ニ必要ナル學術的研究ノ必要ヲ痛感シテナル

#### ロ、燐酸肥料ニ関スル研究

燐酸肥料ノ原料ノ不足ハ目下ノ重要問題ノ一デアル、我北大東島ニハ燐酸岩土ノ大埋藏ガアル、東京工業大學ニ於テハ之カラ「アルミニウム」



ト磷酸トヲ收得スルタメ新方法ヲ立案シ研究シ「アルミニウム」ニ関スルモノハ已ニ一大工場ノ設立ヲ見ルニ至ツタ「デアル」ガ更ニ磷酸ノ研究ニ進メ其ノ工業化ヲ助クル必要ガアル

#### ハ 加里肥料ニ関スル研究

加里、需要ハ莫大デアツテ從來ハ殆ンド皆輸入ニ仰リテ來タカ東京工業大学デハ前述ノ製塩事業研究ト同時ニ加里自給ノ研究ヲナシ其ノ結果其ノ一部ハ大日本塩業会社ヲシテ旅順近傍デ工場ノ試験ニ着手ビシムルニ至ツタカ更ニ學術的研究ヲ要スルコト切ナルモノガアル

### 三 醋酸纖維素新製法

人造羊毛ハ現下特ニ必要ト思ハレル、而シテ醋酸纖維素人造羊毛ハ特ニ高評ガアル又醋酸纖維素ハ壞レナイ硝子タ「フィルム」ニ多大ノ需用ガ

アル、然ルニ我邦デハ醋酸纖維素ノ製造ハ甚ダ幼稚デアル。東京工業大学デハ全ク新規有效ナ「塩化「アセチル」法」ヲ立案シ多年研究ヲ續ケ其ノ結果一部ハ已ニ株式會社鉄興社ヲシテ酒田市ニ大工場ヲ設立セシムルニ至ツタカ更ニ此新立案ニ就キ學術的研究ガ必要トナツタ

### 四 電力ノ利用

第二項「イト」同時ニテ石灰窒素ノ用途ヲ大ナラシメ第三項ノ醋酸纖維素ノ製造ニ依リ「カバイト」ノ用途ヲ大ナラシメ又「アルミニウム」製造ヲ有利ニシテ大電力消化ヲ謀ラントス

### 五 製糖事業ニ伴フ関係事項

製糖ノ副産物ハ「バガス」(搾糟)ト糖蜜トデアル、「バガス」ハ約一億円ノ「バール」ヲ供給スル原料トナル可能性ガアル、然ラズ之ヨリ「バール」ヲ收得スルコトハ現下ニ於テ極メテ重要ナル問題デアル、然ルニ今日其ノ製法宜シキヲ得



ス比「コバルト」製造ハ甚ダ振ハナイ從テ有利ナ新方法立案ハ極メテ重要  
デアル。東京工業大学デハ之ニ適當ナ新「アルカリ」法ヲ立案シ其ノ方  
法採用ノタメ明治製糖株式會社ヲシテ台湾ニ試験工場ヲ設立スルニ至ラ  
シメタ、而シテ此工業樹立ニハ之ニ同聯シテ一層學術的研究ノ要ガアル。  
又糖蜜ニハ加里ガ含有シ同大学デハ全然新現ナル石膏法ニテ之ヲ回  
收スル方法ヲ立案シ其ノ研究ヲ進ムル必要ニ迫ラレテナル

### 六 製塩事業ニ関スル新事項

我邦ノ工業塩ハ事變前マデハ其ノ大部ヲ輸入ニ仰イダガ事變後ハ其ノ不  
足ニ苦シムノデアル、之ガ自給策樹立ハ極メテ重要デアルカ之ニハ平時ノ  
製造ヲ有利ニスル必要ガアル、故ニ東京工業大学デハ其ノ副産物トシテ加里、  
「マグネシウム」原料ヲ採取スルコトノ研究ヲ厚シ新立案ガ出来之デ工  
業塩自給ガ可能ニナルト思フ、之ニ就テハ既ニ第一項「ヨ」第二項「シ」ニ於

### ニ説明シタ

### 七 火藥ノ新製法ニ関スル研究

東京工業大学デハ一方ニ於テ石灰窒素ヲ原料トシテ之ヲ製スル新  
方法ヲ研究シ他方デハ白金代用新電極ヲ製シ之ヲ過塩素酸「アムモ  
ニヤ」ヲ製スル新法ヲ立案シ己ニ日本「カーバイト」株式會社ヲシテ其工業  
的試験ヲナサシメツ、アルガ之等ニ関シ更ニ學術的研究ガ必要デアル

### ハ 燃料ニ関スル研究

本邦ノ燃料ニ関スル研究ハ液体燃料ニ限ラレタル觀ガアルガ東京工  
業大学デハ新ニ固体ニテ液体燃料ト同一效果アル固体燃料ヲ製スル  
研究ヲ進メテ居ル、又新原料ヨリ液体燃料製造ノ研究ヲ進行セシメ  
テ居ル

東京工業大学ニ於テハ全然改米進從ヲ排シ日滿支資源用發ニ関



シ有效適切ナル工業的新方法ノ樹立ニ努カシタル結果立案セラレタル方法ハ欧米ハ勿論我邦ノ他ノ研究所ニ於テ見ナイ新シイモノニ属スルハ当然デアル、此研究ヲ完成スルコト及其研究ヲ根柢トシテ現下必要ナル「資源化学」ノ開拓ヲ導カシムルハ種々ノ関係ニ於テ東工工業大際ヲ以テ、女高ナリト云ハサケレバナラヌ

### 職員数員ノ処置ニ関スル調

#### 一 助教授

定員 三七人

現員 三四人

欠員 三人

イ、應用化学科ニ於テ定員四人ノ処現員三人ニシテ欠員一人ハ代員専任講師一人ヲ以テ之ニ充テツ、アリ

ロ、電気化学科ニ於テ定員二人ノ処現員一人ニシテ欠員一人ハ代員専任講師一人ヲ以テ之ニ充テツ、アリ

ハ、建築学科ニ於テ定員三人ノ処現員二人ニシテ欠員一人ハ代員専任講師一人ヲ以テ之ニ充テツ、アリ

#### 二 助手

定員 六九人

現員 五九人

欠員 一〇人

イ、染料化学科ニ於テ定員四人ノ処現員三人ニシテ欠員一人ハ現在適當



ナル候補者ナキ爲臨時代員トシテ技術囑託員ヲ以テ之ニ充テツ、アリ

ロ、紡織學科ニ於テ定員六人ノ処現員四人ニシテ欠員二人ハ現在適當ナル候補者ナキ爲内一人ハ臨時代員トシテ技術囑託員ヲ以テ之ニ充テツ、アリ

ハ、應用化學科ニ於テ定員七人ノ処現員六人ニシテ欠員一人ハ四年一月二十日欠員生ズハ差シ當リ適任者ナキ爲新卒業生ノ中ヨリ物色ノ豫定ナリ

ニ、電気化學科ニ於テ定員四人ノ処現員五人ニシテ超過人員一人ハ機械工學科定員中ヨリ臨時ニ流用シタルモノナリ

ホ、機械工學科ニ於テ定員十一人ノ処内一人ヲ前号掲記ノ如ク臨時ニ電気化學科ニ流用シタル爲メ改メ臨時定員十人トシ現員八人ニシテ欠員二人ハ時局ノ影響ニ依リ轉官及轉職シタルモノ、補充困難ノ

ノ爲現在專任講師ヲシテ講義指導ヲ擔當スルノ外臨時ニ助手ノ職務ヲモ代行セシメツ、アルモ新卒業生ノ割付配當ヲ得テ任命ノ豫定ナリ

ヘ、電気工學科ニ於テ定員七人ノ処現員六人ニシテ欠員一人ハ現在適任者ナキ爲技術雇員ヲ以テ之ニ充テツ、アルモ新卒業生ノ割付配當ヲ得テ任命ノ豫定ナリ

ト、建築學科ニ於テ定員七人ノ処現員四人ニシテ欠員三人ハ適任者ナキ爲現在專任講師ヲシテ講義指導ヲ担當スルノ外臨時ニ助手ノ職務ヲモ代行セシムルノ外助手ヲシテ助手ノ職務ヲ代行補助セシムルカ如キ方法ヲ採リツ、アリ

### 三書記

定員一八人ノ処現員一六人ニシテ欠員二人中一人ハ目下銓衡中ニ属ス



一特許權

日附番號

名

祿

弁明者

日 和 一、七、三  
二 一 四 一、七

電解ニ鉄又ハ其ノ合金ノ窒化法

加藤 五郎  
益夫

一、五、五  
一一五五九〇

硬化物製造法

河上益夫加藤共五郎

一、九、一  
一一七一五

木材，耐火处理法

社内  
田  
三  
新社

一、二、九  
一一八八〇

海藻ヨリ塩類其他、夾雜物除去法

加藤興五郎

9  
一  
二、  
一〇、  
一五  
—  
= =  
= 九  
九

木材又“均等”材料，耐火处理法

三田  
信行社

7  
一五、二、  
12

---

一三三、六三三

「マダ、不<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>い」又<sub>レ</sub>、其合金ノ防銹法

加藤典五郎

一、五、九、一、二、四、七、九、三

物係表面ノ平滑度指示又ニ記錄裝置

藤田五郎

一三、七、二一  
一三五八一

ウエーブル・エストリッパ合流スル方法

肉  
田  
三  
社

11  
13、  
八、  
七  
—  
二  
六  
—  
五  
—

木材及竹等材种耐火处理法

相内  
田  
三  
社

一三九、八  
一三九、八

木材又、他均等材料ヲ耐火性ナラシムル方法

內用  
三  
新







昭和十三、九、三〇「コンデンサー」用絶縁物製造法

鈴木信一

二 實用新案権

日

附

年

月

日

称

鈴木信一

昭和十三、四、四

二五〇六一九

陶磁器半乾式成形用型

鈴木信一

昭和十三、八、二

二五〇六一六

窯業用品ノ高過サ何重試験機

鈴木信一

文甲三八

十三  
十四  
三  
九

昭和十三年十二月二十日

内閣書記官長

内閣書記官

内閣總理大臣 友

法制局長官

外務大臣

友

陸軍大臣

友

文部大臣

友

逓信大臣

友

厚生大臣

友

内務大臣

友

海軍大臣

友

農林大臣

友

鐵道大臣

友

大藏大臣

友

司法大臣

商工大臣

友

拓務大臣

友

別紙文部大臣請議國史館造營委員會  
官制制定ノ件

ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依テ請議ノ通

法制局